

辞世の句

目次

辞世の句

一、 浅野内匠頭あさののたくみのかみ

二、 西行

三、 在原業平ありのわらのなりひら

*

*

辞世の句

「辞世の句」について

例えば、殿中で事件を起こした浅野内匠頭たくみのかみは、いわゆる「風さそふ花よりもなほわれはまた春のなごりをいかにとやせん」という有名な「辞世の句」を遺し、（その真偽はともかく）、切腹をして無念の死を遂げる結果になってしまったわけである。それゆえ、浅野内匠頭たくみのかみにしてみれば、どうしてもまだ「死ぬに死にきれないという思い」が残っていて、それが辞世の句の中にも反映されているとみてもよいのではないかと思う。そこで、例えば、大石内蔵助がこの「辞世の句」を読めば、（もちろん、読まなくても全く同じことであるが）、例えば、「……わが主君は、死ぬに死にきれない思いを遺して死んでいった。それゆえ、主君の遺した果たせなかつた思いを果たさなければ、主君の魂は、永遠に浮かばれない。この世に未練を残したまま留まり、成仏してあの世に旅立つことができない」と思い定めたとしても、何も不思議なことではない。恐らく、大石内蔵助は、比較的早い段階から、いわゆる「主君の仇を討つ」という考え方に襲われていたに違いない。もちろん、それは、お家再興、その他、ひと通りのことは、やり尽くして、それでもなおだめな時の「最後の手段」として考えていたということである。そして、大石内蔵助に取り憑いたそのような「考え方」（仇討ち）は、如何なる苦難・如何なる困難に直面しても、一貫して変わることはなかつたということである。なぜなら、「……主君の仇を討たなければ、主君の魂は、永遠に成仏できない」からである。それでは、誰がそれをやるのか？ それは、結局、自分がやるしかないという、そういう「決心」（覚悟）なのである。

*

*

次に、西行には、「願はくは、花の下にて春死なん、そのきさらぎの望月のころ」という、非常に有名な「歌」があり、もちろん、この「歌」は、いわゆる「辞世の句」ではなく、恐らく、西行が六〇歳前後から中頃の「作品」ではないかと推測されて、未だ定かではない状況であるが、しかし、人間は、いつ死ぬか誰にもよく分からないものであり、その当時の西行にしても、「……たとえ今日は生きていても、明日はどうなるかまったく分からない」という、そういう「無常」のなかで詠まれた「歌」であることに何ら変わりはないだろう。しかも、西行は、結局、死に臨んでの「辞世の句」というものを詠んではないということ、逆に言えば、この「句」をそのまま「辞世の句」と考えていたとしても、何も不思議なことはないのである。

それでは、この「歌」の意味合いは、一体、どういうものになるのかと言えば、それは、極めて簡単であり、「……願わくは、花の下にて春死にたい、しかも、それは、きさらぎの望月のころ（つまり『二月十五日』のころ）であることを願う」ということである。つまり、一つは、桜の花の下、一つは、二月十五日、という限定付きになっている。これは、一体、どういうことなのか？ まず、考えてみなければならないことは、この「歌」は、その場の興に応じてとか、何か思いつきなどで詠まれた歌などでは決してなく、むしろ全くそ偽りない、西行のあるがままの「実の心」の発露であるとともに、心の底からの衷心からの「深い思い」（最晩年は決心）であり、それは、死ぬその日まで一貫して揺らぐことがなかつたということである。——ところが、当時の歌人たちは、そのように「この歌」を読むことができなかった。俊成も、できなかった。なぜ、できなかったのか？ それは、誰も西行のように「歌を詠んではいなかった」からである。当時の歌人たちは、

いわば「歌をつくるために歌を詠んでいた」ということであり、一方、西行は、一つは、「自心を知る」ためであり、それは、自分の「心を見極める」ということであり、そして、もう一つは、和歌を詠むことよって、最終的には「悟りを開く」ということであり、それは、いわば「釈迦（仏陀）」と終には「一体となる地点」へと辿り着くということである。そして、西行は、まさに「……望月（満月）の頃、満開の桜の花の下で、静かに乱れることなく息を引き取った」ということになるわけである。

そして、それをさらに「深読み」すると、「満開の桜」とは、いわば「歌の成就」であり、そして、「望月（満月）」とは、まさに「心の成就」を、それぞれ象徴していることになるのかも知れない。もちろん、「歌」を詠んだその当初は、西行自身、まだ晩年ほどはつきりとした自覚はなく、できればそうでありたいと願う程度であったとしても、この「歌」は、西行自身の「心の中」で次第に「成長・成熟」して、やがては極めて「大きな意味」を持つようになり、そして、その最晩年において、西行自身が心の底から「願ったこと」とは、すなわち、一つは、まさに「歌の成就」であり、そして、もう一つは、まさに「心の成就」であったということである。つまり、「……願はくは、花の下にて春死なん、そのきさらぎの望月のころ」という歌は、西行自身の「心の中」で、次第に「成長・成熟」して、最終的には「辞世の句」そのものにまでなり果せたということである。

最後に、『伊勢物語』の最終章（百二十五）は、「つひにゆく道」という題であり、それは、「……むかし、男、わずらひて、心地死ぬべくおぼえければ……」という「文章」のあとに、「つひにゆく道とはかねて聞きしかど、きのふけふとは思はざりしを」という、非常に有名な歌で終わっているわけである。そして、この「歌」は、まさに死に臨んでの「辞世の句」であり、作者は、極めて有名な「在原業平」であり、その業平は、元慶四年（八八〇年）五月二十八日に、五十六歳で亡くなっているということである。

ところで、この「歌」を取り上げた理由であるが、それは、この「歌」こそは、この世にある実に数多くの「辞世の句」のなかでも、まさに「最高傑作の一つ」ではないかと思うからである。それでは、なぜ、そう思うのか？ それは、次のような理由からである。まず、歌の意味内容であるが、それは、「つひにゆく道」とは、すなわち、「死ぬ」ということであり、また、「かねて聞きしかど」というのは、「前々から聞いて、よく知ってはいるけれど」という感じであり、それゆえ、全体の意味合いは、次のようになるかと思う。つまり、「……われわれは、この世に生まれて生きて、やがては死んでいくものだと、誰でもよく知ってはいるが、しかし、自分が〈死ぬ日〉が、まさか昨日今日という、こんなにも早く、こんなにも差し迫って、やってくるとは思わなかったなあ」ということである。そして、そのような「想い」こそは、まさに死を迎える人たちの最後の「実感」そのものだろうと思うからであるとともに、古今東西を問うまでもなく、実に数多くの人たちが、同じような「想い」を遺してこの世を去っていったに違いないと思うからである。それは、すなわち、「……つひにゆく道とはかねて聞きしかど、きのふけふとは思はざりしを」ということである。

*

*